

## 特集2：大学教員の職務満足度とウェルビーイング

### 趣 旨

本特集では、大学教員の職務満足度およびウェルビーイングを主題とする。海外の高等教育研究では、大学生のウェルビーイングに関する研究 (Vilhunen *et al.* 2025) や、大学教員の疲弊やバーンアウトに関する研究 (Deep *et al.* 2025: 29、Dewey *et al.* 2024: 521-39) など、関連する知見が蓄積されている。一方で日本においては、学生のウェルビーイングを主題とする研究は複数あるが (例えば伏島 (2015) など)、大学教員の疲弊についてはごく少数にとどまる (例えば看護学大学教員を対象とした氏家ほか (2022: 478-86) など)。

しかし近年の大学を取り巻く環境変化を踏まえれば、日本でも大学教員の職務満足度やウェルビーイングを把握する必要があるだろう。大学教員は、大学教育と基礎研究を支える中核的な人材であり、その働き方や心理的状态は、大学内の主要な活動に密接に関係する。疲弊した教員が学生の成長を十分に支援できるとも、研究成果を積み上げるとも考えにくい。大学院生、とりわけ博士学生は、日常的に教員の姿を間近に見ている。教員の働き方や在り方は、彼ら・彼女らのキャリア選択に少なからぬ影響を与える。よって、大学教員のウェルビーイングを問い、これを議論する意義は大きい。

私たちがこのような特集を企画した背景には、大学教員職の魅力が低下しつつあるという危惧がある。大学キャンパスに身を置くと、大学教員の日常は漸進的に変化し、その全体像は大きく変わっていないように感じられる。しかしその一方で、大学教員職が少しずつ輝きを失っているとの感覚を拭えない。日本の大学教員数は増加する一方で、その身分は不安定化し、役割分化も起こりつつある。自治を通じた共同体感覚も薄れつつないだろうか。大学教員の中には、任期付きという不安定な雇用形態に置かれる者や、研究や教育に充てる時間を確保できない職務実態も見聞する。大学教員職は近年、

研究と教育の両立を中核とする専門職（有本 2011: 381）との認識が広く共有されてきたが、研究または教育のいずれかに偏重せざるを得ない教員が増加している。実際は、有期雇用に基づく大学教員の流動化や役割分化については当事者も含めて肯定・否定の両面が指摘される。

なぜ日本では、大学教員の職務満足度やウェルビーイングがこれまで問われてこなかったのだろうか。その一因としては、大学における急速な変化が若手教員職に限られる点が挙げられる。大学教員の在り方も多様である。実際、少なくとも研究型大学に所属する教員の多くにとって、自由度や裁量および知的刺激に恵まれた環境であることは否定できない。これが、大学教員の満足度やウェルビーイングを問わない姿勢につながってきたのではないだろうか。さらに、文化的要因の影響も看過できない。大学教員が自身の権利や労働条件について言及することは、使命感や公共性への奉仕といった規範意識と必ずしも親和的ではなく、ウェルビーイングを論じること自体が控えられてきた可能性がある。しかし課題が認識されなければ、適切な検討や対応も講じにくい。大学教員の職務や働き方が大きく変化するなかで、変化に即した議論を行うことは不可欠であろう。

欧米を中心とした諸外国で大学教員職の満足度やウェルビーイングに注目が集まる背景は、より切迫している。本来、大学教員職の魅力は、自身の関心に基づく研究を行い、学問の拠点として自由闊達な議論を通じて探究を深められる点にあった。分野によっては、賃金水準や労務管理の面で企業等の研究職に見劣りしても、研究における自由度の高さこそが大学教員職の主要な魅力であり、そこには社会的威信の高さも付随していたと言える。しかし、テニユア職を獲得するまでの競争や研究業績に対する圧力は、日本以上に強いと推察される。加えて、大学を取り巻く政治的・経済的・社会的圧力の高まりやキャンパス内での混乱といった複合的要因により、大学教員の魅力が相対的に低下し、自らの職務や生活に対する認識が大き

く揺らいでいるとされる。特に欧米諸国においては高等教育そのものに対する反感や不信が顕在化し、学問の自由が疑問視される事態が生じている。とりわけトランプ政権の成立以降の米国では著しい。

こうした状況のもとで、日本の大学教員は自らの職務やその環境にどの程度満足しているのだろうか。何が彼ら・彼女らの認識に影響を与えているのかを問う。本特集では次の内容を含めている。まず【中西論文】では音楽単科大学における英語専任教員としての経験を文化的価値観に起因する構造的周縁化としてオートエスノグラフィ手法により捉える。これは、大学内における領域を軸とした階層構造認識を明確にし、一般化に対する示唆を含む。【松本論文】は米国の非テニユアトラック教員の職務満足度と組織適応の関係について人間関係等から把握することを試みている。米国の大規模データに基づく貴重な分析である。【加藤論文】もまた米国の大学教員を対象とし、アジア系女性外国籍教員の大学在職意向を明らかにするものである。これら特集内容が、大学教員の職務満足度やウェルビーイングに関する示唆を含み、今後の大学教員の在り方を論じる契機となることを期待したい。

編集委員長 加藤真紀

有本章、2011、『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部。

Deep, P. D., Ghosh, N., and Chen, Y., 2025, “Faculty Burnout in Higher Education: Effects on Student Engagement, Learning Outcomes, and Artificial Intelligence-Driven Institutional Responses”, *Journal of Educational and Developmental Psychology*, 15: 29-42.

Dewey, J., Pautz, M. C., and Diede, K. M., 2024, “How Do We Address Faculty Burnout?: Start by Exploring Faculty Motivation”, *Innovative Higher Education*, 49(3): 521-39.

伏島あゆみ、2015、「大学生の主観的ウェルビーイング向上における対人関係と健康行動の役割」日本行動科学学会。

氏家陽子・鈴木英子・平本康子・横尾由希子・村山久美子、2022、「看護大学教員のバーンアウト関連要因」『日本健康医学会雑誌』30(4): 478-86。

Vilhunen, E., Kiuru, N., Mäkikangas, A., Vasalampi, K., Kastarinen, P., and Rantanen, J., 2025, “Study Well-Being Profiles, Recovery Strategies, and Academic Performance among University Students: A Person-Oriented Approach”, *Higher Education*. [DOI: 10.1007/s10734-025-01411-5]